

名を得た本邦を通じて広く分布し（南樺太、北海道阿寒、日光湯本、越中有峯、富士裾野、伊豆天城山、土佐大戸山、因幡那岐山等）又欧州産の *C. quercinum* と鑑定された標本中にも時々沃度で藍紫色を呈するものがあり本種であろう、日本で従来の経験ではこの種は多くは薄暗い多少湿潤な場所の朽木上に発生し多数の子器を密生するのが普通である。然るに今回黒川君が苗場山（越後側）で採集した標本は杉皮上に着生し子器が疎に散生し立地条件も光が多少よく入る少々乾燥した場所に生ずるものの如くでこれを一応一型として区別した。勿論子器の沃度反応や孢子の大きさ等はタイプと何等の差違はない。

○ オオハナヤスリ・ハナヤスリ・コヒロハナヤスリについて（行方富太郎）

Tomitaro NAMEGATA: On three species of *Ophioglossum*.

ハナヤスリ属の中でオオハナヤスリ・ハナヤスリ・コヒロハナヤスリの三つの区分は各種間につながりがあつて至難であるが、オオハナヤスリは他の二つと全く違つた固定した性格を持つているのではつきり区分できる。すなわちオオハナヤスリの生態を長年経続して観察した結果、休眠明けの春の芽出しが他のものよりも早く例年3月15日前後であり、また地上部草体の枯死することも早い。筆者の栽培品と住居に近い土屋・山口・不動ヶ丘での自生地ならびに大阪での観察では、いずれも6月下旬より7月中旬の間に黄変枯死しているので、日本のこの属の中では一番生活期間の短い種である。またハナヤスリとコヒロハナヤスリでは、春第1次に成育した草体が枯れると続いて第2次が成育し、さらにこれも枯れて11月降霜期前には第3次発生の草体が成育しつつあるが、オオハナヤスリには全くそのようなことがなく、初夏を過ぎると夏草の茂みに覆われて枯死した後、翌春まで9カ月もの長い休眠期にはいる。それから草体が必ず単生であることも特性で、同一根茎から2本以上出ることとはなく、筆者は多くの自生地で20年間にただ1回変態型の2本生のものを採集したことがある。

ハナヤスリはコヒロハナヤスリと共に4月上旬に芽を出し11月の降霜期まで草体が成育を続けるので、休眠期間は4カ月である。葉形ではコヒロハナヤスリとオオハナヤスリがよく似たものが出、葉脈ではハナヤスリとオオハナヤスリがよく似ていることがある。ハナヤスリの裸葉の基部から上つている脈は何本か平行していて葉端に至るまでの間に支脈の作る網目は細かいが、ハナヤスリでは平行せずにとだちに分岐して脈間の網目はあらくて大きい。それゆえ正常型では区分できるが中間型が多いのでまことに厄介である。

西田氏が孢子の形態によつてオオハナヤスリとハナヤスリとを同一種とされたことは、困難なこの属の分類に一石を投じたものとして敬意を表するが、以上のように明確な性格を持つている両者を一しよにすることには遺憾ながら同意できない。